

「レトロでんしゃ館」レポート

路面電車保存館を訪ねて

名古屋市交通局／市電・地下鉄保存館

「レトロでんしゃ館」

【施設概要】

所在地：愛知県日進市浅田町笹原30（交通局日進工場の北側に位置）

地下鉄利用の場合：鶴舞線「赤池」駅下車徒歩7分

自動車利用：国道153号「赤池2北」交差点からすぐ

開館時間：午前10時～午後4時

入場料：無料

休館日：

水曜日（休日の場合直後の平日）、年末年始（12/29～1/3）

問い合わせ TEL052-807-7587 FAX：052-807-1158

公式サイト：http://www.kotsu.city.nagoya.jp/archives/denshakan/retro_index.html

昭和49年（1976）に全廃された名古屋市の市電と、昭和32年（1957）の地下鉄開業時に登場した車両を静態保存したこの「レトロでんしゃ館」は、平成12年6月2日にオープンしたばかりの、車両静態保存館としては国内でも最も新しい施設である。

立地は、名古屋市交通局の日進工場敷地内の一角にある。工場内にあるといっても、いわゆる作業の騒音や出入りのトラック等による喧噪といったノイズはほとんど聞こえない。実際、工場敷地の入口から、同館のエントランスまでのアプローチは、隣接する国道153号バイパスの通過音に押されて進むような錯覚を覚えてしまう。

建物は「デザイン」的訴求をいっさい排除した、電車の車庫という風情でもなく、内外観ともに体育館を思わせる、いかにも公共的なローコスト建築である。

オープンして比較的まだ時間がたっていないことや、交通局の工場内にあるという環境もあってか、同館内外の清潔さは十分に保たれている。まさに“電車っぽい”リノリウム床には、天井窓からの自然光とライトアップ用の照明が複雑に反射している。

落書きなどに無縁の展示車両は「新車」同様に、また、壁面を利用して展示されている資料類には日焼けもない。高い天井からは、展示車両が当時走っていた路線の方向幕が下がっている。地下鉄のような大型車両が2両編成で展示されているとはいえ、高さ・広さが確保されており、圧迫感はほとんど感じない。

この「レトロでんしゃ館」の正式名称は、「市電・地下鉄保存館」である。その名が示すように、延床で742.25平方メートルの平面に、往年の名古屋市電を代表する3型式3台と、昭

図1 駐車場と工場内のサイン類



図2 レトロでんしゃ館の外観



和32年の地下鉄開業とともに走り出した電車1形式（2両編成）が、きれいに化粧直しをされ、静態保存されている。

展示車両を、写真や資料類をパネルにした「展示コーナー」が挟むレイアウトである。そして、鉄道関係の資料館に最近顕著な“公式”のとおり、エンターテイメントとして、名古屋の地下鉄路線別の「列車運転シミュレーター」4台が設置されている。

われわれが訪ねた日は猛烈に風が冷たい冬日であった。そのため、同館の暖房と、天井や壁面の窓ガラスから差し込む日差しが冷え切った体をやさしく暖めてくれた。しかし、どうやら夏はその逆・・・ともいえないようだ。冷房のダクトは、電子機器が集まった「列車運転シミュレーター」付近にのみ配置されている。どうやら、基本は窓からの自然空調らしい。それでも、何の文句があろう？展示されている電車が活躍した頃は、通勤電車に冷房などはとても珍しい時代だったのだから。追体験のための環境演出として、ここは入場無料であることにも配慮して、四季を受け入れようではないか。

図3 クリネスが行き届いた内装



図4 冷房ダクトと天井からの自然光



図5 天井から吊り下げられた電車の方向幕（実物）



[次へ](#) 



「レトロでんしゃ館」レポート

さて、展示車両を巡るのに、必ずしも決まった動線が設定されている様子でもないが、一応、車両展示＞パネル展示のヒエラルキーが高低差で表現されている。

路面電車の方は、横浜市電保存館と同様に、電停をセットで復元しているが、“新しすぎて”それほどリアリティがない。というのも、展示車はすべて化粧直しを済ませているため、ちょっと見でもくたびれ感がない。天井に冷房装置を載つけば、このまま広島や熊本の町を走り出しそうな雰囲気である。

横浜で見た、動を止めた機械の静のたそがれとは全く無縁な雰囲気だ。もちろん、展示車のデザインが、当時としては（昭和13年製の1421型等）窓を広くとった、比較的垢抜けた印象を持たせるのもそう感じる要因のひとつなのであろうが・・・。

図6 保存車両の展示風景



館内では、当時の車内を録音が、繰り返しBOSEのスピーカーから流されている。ワンマン運転手の「次は栄、栄・・・」「お降りの方はいらっしゃいませんか」などのアナウンス、チンチン、釣り鐘モーターのゴーツという加速音響、キーッと鳴くブレーキ等がずっとアイドリングされている。そのリアリティと、化粧直しを済ませた展示車両では、どうもピンと来ない。むしろミスマッチだと感じるのだけど、「音」それもドキュメントを来場者に聞かせる演出は評価したいと思う。実際に当時これらの車両あるいは路線を利用していた名古屋の方には、音だけの情報だけでも、脳の海馬を刺激する体験になるはずだ。

図7 当時の車内録音を放送



筆者が出身地である大分県大分市を走っていた大分交通別大線の電車に乗っていたころは（中学生までだったが）、必ず運転席の後ろに座って、運転台からの風景を目をさらにして見つめていた。そのとき耳に入ってくるのは、運転手が直接制御のマスコン・レバーを回すときのガチャガチャという操作音、レールのつなぎ目の振動、そしてモーターの音。連接車の場合、接合部の幌が（とても珍しかった）こすれ合う音。目をつぶれば100%ではないが、そんな音を思い起こせる。

実は母もこの電車で通勤していたのだが、それから30年が経過して、老いた母とこの話題をすると、彼女は「懐かしいね。あのガチャガチャって回すハンドル」とにこにこしながら、手でぐるりと円を描く。音もまた、自分史をイメージあるいは想起させる重要なアプローチ方法なのである。

展示車両を説明するプレートには、その製造のエピソードや機構の特徴に加え、当時の時代事情の解説もある。その車両がいつごろ、どんな状況で作られたのかが興味深い。つまり、時代状況を客観的に把握しながら都市交通の花形だった路面電車への時代性の投影を把握できる。

こうした情報参照は、佐久間レールパークにも見られたのだが、東海地方の？得意技でもないだろうけど、ぜひ真似すべき手法であろう。

「レトロでんしゃ館」レポート

展示車両は車内に入って座席に座りつり革につかまり、運転席にも自由に出入りが可能である（ちゃんとマスコン、ブレーキとも動かないがレバーが付いている）。活躍していた時代を感じるように、可能な限り、車内広告やサインを含めて当時のままに復元しようという努力を感じる。特に地下鉄の100型車両には、この電車がデビューしたころ、すなわち昭和32年・名古屋市営地下鉄開業当時のさまざまな関連エピソードが掲載された新聞記事を、『新聞で見る地下鉄の歴史』として、車内吊り広告の位置に時系列で掲示している。これと、展示コーナーに飾られた市電・地下鉄の歴史を追ったパネル展示のエピソードを読み比べていくと、名古屋人でなくても当地の市電・地下鉄を巡る都市交通の進展とその因果関係について大凡は理解できる。

なお路面電車の方は、残念ながらインテリアは“工場出荷時”状態であり、製造年代順に展示車両を見たときに、床板からリノリウムへ、電灯から蛍光灯へ、木枠からスチール枠へといったインテリア構造の変化を検証できるに止まってしまう。

さて、展示車を紹介しておこう。まずは路面電車＝名古屋市電である。解説は同館の公式サイトを参照してほしい。

(1) [1400型1421号](#) (2) [2000型2017号](#) (3) [3000型3003号](#) 地下鉄車両は[100型\(107号車+108号車\)](#)と[その台車](#)が展示されている。

同サイトには、[展示コーナー](#)、[プレーコーナー](#)の解説もある。

このプレーコーナーにひとこと。4台の名古屋地下鉄の「列車運転シミュレーター」はそれなりに完成度もあって楽しめるが、それにはテレビゲームの経験が問われそうだ。

筆者のレベルはアーケードでの「電車でGo!」程度だが、このシミュレーターは、どうやってスタートして中断するのか理解するのに苦労した。もう少し簡単なインターフェイスの方が、この施設を目的訪問する世代に合致していないだろうか。それに、最新の高速地下鉄をアピールしたい交通局の気持ちもわからないではないが、「電車でGo!」の松山市内線バージョンが既に登場していることからして、いまはなき市電の操作を、当時の名古屋の都市風景を復元させて、運転のうまさよりも都市の変貌を再体験できるコンセプトとする方が、施設のありようと来場者満足につながるのではないか。無料ということもあり、これでは、休み中は子供で場荒れするのは火を見るより明らかだ（静かに展示を見たい人の神経を逆撫でする結果となる）。

一方、このシミュレーターと一体に並べられている「資料検索システム」は、非常に良くできたデータベースであった。画面タッチのインターフェイスで敷居が低く、しかもデータがちゃんと整理されており、“検索したけど何もない”“やたら工事中”のような、人を馬鹿にした設計とは大違いであった。正直、プレーコーナーを減らして、これをもっと増やして、内容もさらに充実させてもらいたいと願うばかりである。

図8 地下鉄100型内の『新聞で見る地下鉄の歴史』



次へ 



「レトロでんしゃ館」レポート

さて、同館でいちばん驚いたのが、お土産類の充実である。入場無料だから、せいぜいリーフレットをもらえる程度だろう・・・と決めつけていたのだが、いい意味で裏切られることになった。

お土産というより、正確には、記念品と位置づけるべきなのだが、これまで編集部が訪ねた鉄道関連施設で、最も熱心で、また“気が利いた”アイテムも見受けられた。もちろん有料だが、数百円の単位であるから、欲張ってみても財布がすぐに軽くなることはない。購入したアイテムを順に紹介しよう。

(1) 来場記念カレンダー (1枚100円) 図9

見学記念として、訪問日と希望する月(2ヶ月分)を印刷したA4サイズのカレンダーをその場で作成してくれる。図柄は、同館の展示風景または展示車の現役時代のモノクロ写真から選択できる。要するに、年に6回くれば、向こう1年分のカレンダーが完成するというわけだ。

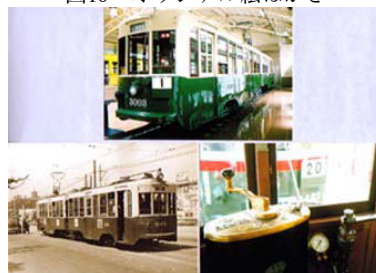
図9 来場記念カレンダー



(2) オリジナル絵はがき (1枚50円) 図10

展示物をそのまま絵はがきにするのは当たり前。同館では、市電3両、地下鉄100型のそれぞれの展示車両が実際に活躍していた往年のドキュメント写真と現在の展示風景を併せて選ぶような工夫をしている。これで展示車両が、“本当に”活躍していたこと、レプリカではなく、実際に名古屋の町に生きていたことがちゃんと実証されている。なかでも3000型と100型は、運転席のショットも加えられるほどの気配りであった。

図10 オリジナル絵はがき



(3) 入館記念バッジ (1枚100円) 図11

ごらんのように展示車一台につき1種類。果たして誰がこれを購入するのだろうか。企画は子供向けというか幼児向けなのであろう。それにしても電車の「顔」はいただけない。正直言って、これらの「顔」には特徴がない。むしろ、3000型のような路面電車には珍しい連接車体や2000型のスカート構造などの特徴的な側面を比較するとか、各形式の活躍当時の景観をモチーフにしたイラストにする等の演出がほしい。

図11 入館記念バッジ



(4) オリジナルシール (1枚150円) 図12

バッジよりシールの方が購入する側の年齢と使い途を問わない分、収入増に寄与するだろう。実はこれらの記念品類の素材に使われているビジュアルはすべて共通、使い回しであるが、行き先表示板と交通局の銘板はこれだけに採用されている。

図12 オリジナルシール

実は、これ以外にも名古屋市交通局の施設として、さまざまな記念品や書籍類がショーガラスに展示されていたが、「レトロでんしゃ」のコンセプトを反映したのは目に付く限り以上のような品揃えである。

以上、まとめて1,350円。公共の施設として、

品物の内容と照らし合わせても、十分納得に値する価格設定である。これらの販売は、エントランス前の「事務室」で行われている。なお、本業ではないにしろ、有料のサービスとするならば、これらの陳列について、一度VMDの基礎を学ぶ必要があるだろう。

しかし、である。これだけ、多種多様な記念品を用意して、来場者の記念と収益確保を図ろうとする気持ちはわからないでもないが、肝心なものが抜けている。それは、オフィシャル・ガイドブックである。「交通局50年史」のような総括論ではなく、ここに飾られた市電と地下鉄の事情に限定した編集によるものだ。展示車両はもちろんであるが、例えば、保存されず魚のデパートとして海中で第二のお勤めを果たすことになった型式はどんなで、どこに沈められ今はどうなっているのかである。また、市電のなくなった道がどのように変貌したかの今昔比較もいい（参考にできる書籍が多い）。もちろん、企画展示コーナーでパネル化された情報、掲示されている写真なども収録する。

つまり、すでに失われた時代の市電・地下鉄に関するガイドブックであり、現代の視点から見た都市工学入門書的な内容だろうか。もっといえば、「資料検索コーナー」で利用できるデータベースをCD-ROM版として提供するのも一案ではいのだろうか。

「レトロ」とは路面電車を知らない層に向けてのキャッチフレーズだ。しかし、知っている、あるいは実際に乗っていた体験を持つ人間は、電車そのものへのレトロ感よりも、その電車で都市を移動し、そのモーター音を都市のダイナミズムと感じていた当時の自分を再検証できる時代に感性を持つ。つまり「路面電車」を交通インフラと位置づければ、レトロは車両というハードに限られるかもしれないが、都市の情報インフラであったと見るならば、都市の胎動と変遷、すなわちコミュニケーション空間としての記録にフォーカスが移る。

それを個人が再整理するのはかなり難しい作業だが、この場所で気づき、そして記憶のアメーバを再結合できれば、それは思わぬ喜びとなる。気づきは、展示されている車両や設備そしてパネルが十分にその役割を果たしている。あとはオフィシャル・ガイドブックのような再結合のためのフックが必要なのである。

【付記】

同館の見学と同時に、隣接の（というか、レトロでんしゃ館そのものが一部なのであるが）名古屋市交通局の日進工場の見学もできる。希望日の1週間前までの電話予約制（052-801-8693）で、時間は10時または13時から約50分となっている。

また、関連施設として「[市営交通資料センター](#)」（名古屋市中区丸の内3-10-4丸の内会館6階）もある。こちらには車両展示はないが、路面電車・地下鉄車両の保存パーツの展示や交通関係の資料閲覧、列車シミュレーターなどが用意されている。「レトロでんしゃ館」とはスタンプラリーがセットされている。



図13 事務室の陳列状況。VMDを配慮したい。



[レトロでんしゃ館TOPへ](#)

